

# 国際緊急援助隊ニュージーランド派遣への参加

Participation of Japan Disaster Relief team for New Zealand earthquake

国際緊急援助部会 川端 憲敏、寺本 隆幸

## 1. 国際緊急援助隊とJSCA

外務省管轄の国際協力機構（JICA）が、災害時に相手国の要請により海外において人名救助を行う部隊が、国際緊急援助隊である。相手国の要請により発動指令が出ると、24時間後には成田を出発する緊急対応部隊であり、外務省・JICAに、警察・消防・海上保安庁の救助隊が協力している。

国際連合による国際援助部隊に対する認証制度があり、構造評価の専門家である構造技術者（Structural Engineer）の参加が必要条件とされている。日本は、昨年3月に都市型捜索救助チームとしての最高レベル（heavy duty）の認定を受け、その中に構成要員として構造評価の専門家も要求されていた。JSCAは国際協力の一環としてこれに協力し、国際緊急援助部会に現在11名が参加し、6名がJICA講習を受け隊員登録をしている。上記認定試験には、JSCAからは大越俊男氏が参加して、合格に貢献している。

さらに、年2回の1週間程度の技術向上・国際緊急援助隊での行動手順・警察/消防/海上保安庁の連携などの訓練にも、JSCA隊員が参加している。

地震時の国際緊急援助隊では、今回の1次隊の水野和夫氏、3次隊の川端憲敏が初めての構造評価員派遣である。

## 2. ニュージーランドへの緊急援助概要

2011年2月22日12時51分（日本時間8時51分）、ニュージーランド（NZ）南島のクライストチャーチ市南東10km付近深さ5kmに、マグニチュード6.3のNZカンタベリー地震が発生した。同日中にNZ政府の要請により、日本政府は国際緊急援助隊の派遣を決定した。

今回は、1次隊（2011年2月23日～3月2日）66名、2次隊（2月28日～3月7日）32名、3次隊（3月6日～3月12日）32名が派遣された。

震災直後に派遣された1次隊は、標準的な国際緊急援助隊構成として救助隊本隊（警察・消防・海上保安庁の救助隊員）・ハンドラー（救助犬部隊）・医療班（隊員の体調管理）・構造評価員・JICAの業務調整員が参加した。2次隊は、活動が明確だったためハンドラーと構造評価は参加しなかった。3次隊は、新たなビルの調査などが要請されていることより、構造評価も参加した。

1次隊は、日本人被災者28名のほとんどが被災したCTVビルにおいて捜索・救助を行った。2次隊においても1次隊に続いてCTVビルを中心に任務を行った。

3次隊は、2次隊任務中の現地時間3月3日15時にNZ政府が、「被災地における作業を捜索・救助（search and rescue）から収容（recovery）への移行」を発表したため、規制区域および規制区域外の公共建築物等の解体撤去のための最終調査および貴重品回収などの任務を行った。

## 3. 緊急援助3次隊としての活動

川端憲敏が、国際緊急援助隊3次隊として派遣が決まったのは、3月5日（土）の20時過ぎであり、翌日6日（日）の15時に成田空港集合の要請であった。

2次隊の活動中にNZ政府は、救助の終結を宣言していたので、事務局から「規制区域内の建物において、取り壊し前の最終的内部捜索が主な活動内容になるらしい」との概要を聞いた。そのために、2次隊では参加していなかった構造評価も同行することになった。

現地では、中心街は規制され自由に出入りできない状態であり、緊急援助隊の任務は復興支援のため危険建物の取り壊し前の確認作業であった。毎朝、各国の緊急援助隊とNZ本部との会議があり、その時点で各国の作業が割り振られた。日本隊は、2次隊までほとんどCTVビルで任務していたが、3次隊においてはNZ隊などの任務に随行し作業を行った。

1日目は規制区域外の民族博物館で、その建物の中には貴重な資料などがあり、今回の地震により建物（1907年竣工）



写真1 崩壊したCTVビル  
Photo 1 Collapsed CTV Building



が被災し取り壊しを行う予定である。一応、建物内空間は維持されているが、外壁・パラペットなどが煉瓦造であり、建物入り口から内部資料を搬出するには時間がかかり作業中の余震などにより煉瓦の落下が懸念されていた。建物入り口に直径1,400程度の鋼管を差し込み、その中を隊員が通って落下物による2次災害を防いでいた。2時間ほどの作業により、コンテナ2杯分のほぼ全ての資料を搬出して無事任務終了した。

2日目以降は、商店などを最終確認した。対象建物を割り当てられ、現地において建物に侵入可能かどうかや作業中の余震などに対しての行動方針を打合わせ、構造評価者として提言を行った。内部捜索を行って現金・貴金属・ノートパソコンなどの貴重品を搬出し、用意してあるドラム缶に入れ封印を行った。

今回、地震と同時にクライストチャーチ中心部が規制され、救助に関係のない人は出入りを禁止されていたので、援助隊員は身分証明のIDカードを携帯していたが、その上制服を着ていても町中を単独で移動していると軍や警察に拘束される可能性があった。商店においても商品などが全くそのまま（ショーウィンドウが割れていても）放置されていたが、それらは持ち主の了解のもとそのまま解体するようである。あくまで、最低限の搬出により不公平感をなくすことが最終確認の目的であったが、ただ、我々日本隊はそのことが十分理解できず、いろいろ持ち出そうとしてNZ側から指導を受けていた。この作業は個人財産の解体であり、市長がサインして初めて作業が開始できる任務なので、なかなか作業が開始されず1日のほとんどが待ち時間であった。救助隊員は、救助活動することに使命感を持ってきているため、このような待ち時間が長くなる作業では緊張を維持するのが大変のようであった。

#### 4. 作業環境と隊員生活

オーストラリア・アメリカ・中国・シンガポールなどが、この時点では作業を行っていた。町中での任務では、まだ



写真2 サムナー博物館  
Photo 2 Sumner Museum

水道が復旧していない所で救助員が作業するため、手洗いはアルコール洗浄材で行い、トイレは各区画に仮設トイレが規制区域内外ともに置かれていて皆で使っていた。

今回の被災地域が限定されていたこともあり、CTVビルの横の公園に各国救助隊とも野営していた。ただ、1カ所に集まっていることにより、NZ側からいろいろのサービス（隊員がすべて無料で利用できる24時間営業の食堂、洗面所、シャワーなど）が提供されており、事前に聞いていた自己完結型の任務とはかなり違っていた。

国内訓練でも今回持参した非常用食料を食べた経験があるが、アルファ米などの食事がとても美味しく、つつい食べすぎてしまった。支援要員であるJICAの業務調整員が、いろいろ調理して絶えず工夫してくれているので、食事の部分においてはかなり満足できた。食事の合間にもいろいろお菓子など用意されており、その上、今回は食堂（見た目はかなりカロリーが高そう）があるので、非常に食事面では充実していた。

今回は、川端にとって初めての南半球であり、日本を半年先送りした気候だと思っていたが、野営するにはかなり寒く寝袋の中に潜り込んで寝ていたが、寝袋も結構快適であった。町は規制され人はいないし、電気もまだ通っていないので、夜空が綺麗に見えるかと思っていたが、野営地は一晩中電気が点灯していてそれ程綺麗ではなかった。

現地においては実質3日間、NZ側の要請により規制区域内外の建物内部の重要物の搬出などの任務をこなした。川端個人にとっては、かなり自由に規制区域内などを隊員の人と動き回れたことは、いろいろ勉強になったと感じている。

ニュージーランドのカンタベリー地震において、亡くなられた方々（日本人28名を含む）のご冥福を、心よりお祈り致します。

また、国際緊急援助活動に参加したいというボランティア希望者を募っていますので、事務局へ連絡ください。英語力は、それ程必要とされません。



写真3 活動現場  
Photo 3 Recovery Operating